

研究所報

No.33

1995. 11. 30.

目次	辞書の記述	1	
	1995(平成7)年度「指定研究」 研究計画紹介	2	
	1994(平成6)年度「指定研究」 研究経過報告	3	
	1994(平成6)年度 「一般研究」研究結果概要	10	
	「第8回ヨーロッパ真宗会議」 に参加して	17	
	アメリカ宗教学会1994年度 年次大会参加報告	21	
	真宗総合研究所集報 1995. 4-1995. 9	24	

辞書の記述

所長 片岡 了

辞書は学問研究に不可欠であるが、辞書にも時に誤謬なきを保し難い。単純な誤植から記事本体の不備もある。一つの事例を挙げよう。「阿吽」という語がある。これを、或る国語辞典に「悉曇の字母の初韻と終韻。最初と最後。」と説明している。これは「阿吽」が日本語語彙の中で「事物の最初と最後」の意味に用いられる所以を言うのであるが、この記述には不審な点がある。「字母」というものに初韻・終韻ということが成り立つであろうか。これは「字母表」のことを言うのであろう。しかし、そう訂してみても猶不審ははれない。悉曇字母表には五十字門と四十二字門の二種類がある。ところが、両者とも初字は「阿」（梵字は省略する）であるが、終字は前者が「又」で後者が「茶」であって、「吽」ではない。のみならず、両字母表とも表中に「吽」（勿論当該音も）は全く存在しないのである。それはその筈であって、「吽」（の原梵字）は四字の合成字であって単独の字母ではないから、単字を載せる「字母表」に出る筈がないのである。智廣の『悉曇字記』には第十八章「孤合之文」に「兩重慶多字」として「吽」ほか二字をあげている。そして「此章字類、流派無盡」と述べている。さらにそのあとに「半体文」「印文字」を記し、「此類甚多」としている。即ち此らは合成せられた字（梵字）であるから「字母表」には載らず、従って順番は立たず、しかもその数は「甚多」である。そういう「吽」に「終韻」ということは成り立たないのである。上記辞書の記述は明らかに誤りである。

では、その誤りは如何にして生じたか。それは、その項の記述者が仏教用語に疎いために、仏教辞典の説に依ったからに違いない。或る著名な仏教辞典には「悉曇の字母の初音と終音。すなわち、悉曇五十字門の最初の字と最後の字。」とある。これは殆ど妄語と評すべきで、自損損他の過は逃れ難い。これもまた先人の跡を追ったからであろう。

そもそも此らの記述の源は何処に発するのか。その説の始まりは浩浩洞編の『仏教辞典』（明治四十二年九月刊）にある。これは近代における仏教辞典の嚆矢をなすものであるが、そこには「阿は口を開きて発する音声にして字音の初、吽は口を閉づるときの音声にして字音の終なり。」と説く。これは決して「悉曇字母表」の初・終と言っているのではないが、しかしそこに言う「字音の初・終」なる表現が明確を欠く結果、上記のごとき解釈を生み出してしまったものと思われる。そこで、その先蹤をさらに遡っていくと鎌倉初期の密教書の記述にたどりつく。そもそも、「阿吽」を一つの「語」として捉えようとした場合、それは平安末期日本密教の造語とすべきものなのであるが、それについて例えば覚空北畠親房の『真言内證義』に「阿を、無の義不生の義——諸声の初なりとも知れり。吽をも、因業なり風なり諸声の終也とは知れり。」と説いている。これは字母表の話をしていっているのではなく、「阿」・「吽」両字に理智二法身の徳ありとする密教の所説にもとづいて、両字の徳を言っているのである。ところが、このような説き方が輾転して冒頭に見たごとき記述に立ち至ったものと考えられるのである。

辞書の僅かな過息をあげつらっているのではない。ここに例としたのは寧ろ稀なケースである。しかしそれがほぼ一世紀近くも受け継がれてきたことに或る種の感銘を覚えるのである。自然科学にあつては基礎とする学説の誤りは物理的に発見され易いが、文科系の学問においては、それが検証されないままその基礎の上に新たな論説の展開される事が時として生起する。宣長は、師の説に泥むなかれ、と言ったが、また「いくたびもかへさひおもひて、よく確かなるよりどころをとらへ」て論ぜよと戒めている。

1995(平成7)年度「指定研究」研究計画紹介

研究名	研究課題および研究組織
特定研究 大学史編纂研究 代表者 学長・訓覇 嘩雄	研究課題 「近代における大谷大学の成立と展開の研究」 研究員 武田 武麿 (チーフ・教授) 神戸 和麿 (教授) 佐々木 令信 (教授) 友田 孝興 (教授) 福島 光哉 (教授) 門脇 健 (助教授) 延塚 知道 (助教授) 三明 智彰 (助教授) 一楽 真 (専任講師) 宮崎 健司 (専任講師) 片岡 了 (所長・教授) 兵藤 一夫 (主事・助教授) 研究補助員 稲葉 広由 (大学院博士課程満期退学) 星名 万美 (大学院博士課程)
特定研究 国際仏教研究 代表者 学長・訓覇 嘩雄	研究課題 「諸外国における仏教受容の様相の研究」 研究員 多田 稔 (チーフ・教授) 安富 信哉 (教授) 宮下 晴輝 (助教授) 加来 雄之 (専任講師) 樋口 章信 (専任講師) Robert F. Rhodes (専任講師) 渡辺 啓真 (専任講師) 片岡 了 (所長・教授) 兵藤 一夫 (主事・助教授) 研究補助員 池田 真 (大学院博士課程) 安武 智丸 (大学院博士課程) 山本 和彦 (大学院博士課程満期退学)
委託研究 真宗史料研究 代表者 学長・訓覇 嘩雄	研究課題 「東本願寺近世近代史料の整理ならびに『真宗史料叢刊』の編纂」 研究員 名畑 崇 (チーフ・教授) 大桑 斉 (教授) 木場 明志 (助教授) 草野 顕之 (助教授) 嘱託研究員 上場 顕雄 (本学非常勤講師) 福島 和人 (本学非常勤講師) 西田 真因 (真宗大谷派教学研究研究所員) 谷端 昭夫 (本学非常勤講師) 研究補助員 上杉 義麿 (大学院博士課程満期退学) 武田 朋宏 (大学院博士課程) 服部 了潤 (大学院博士課程) 平野 寿則 (大学院博士課程)
委託研究 西藏文献研究 代表者 学長・訓覇 嘩雄	研究課題 「大谷大学所蔵の北京版大藏経および蔵外文献の研究」 研究員 小川 一乗 (チーフ・教授) 片野 道雄 (教授) 小谷 信千代 (助教授) 白館 戒雲 (助教授) 兵藤 一夫 (助教授) 嘱託研究員 由郎 (フランス国立科学研究センター主任研究員) 福田 洋一 (東洋文庫研究員) 研究補助員 加藤 秀樹 (大学院博士課程満期退学) 吉田 暁正 (大学院博士課程)
委託研究 大藏経学術用語研究 代表者 学長・訓覇 嘩雄	研究課題 「『大正新脩大藏経』経集部関係典籍における学術用語の研究」 研究員 鍵主 良敬 (チーフ・教授) 木村 宣彰 (教授) 古田 和弘 (教授) 一色 順心 (助教授) 織田 顕祐 (専任講師) 山野 俊郎 (専任講師) 研究補助員 長沢 円 (大学院博士課程満期退学)

1994(平成6)年度「指定研究」研究経過報告

特定研究

大学史編纂研究 —近代における大谷大学の 成立と展開の研究—

研究員・チーフ 武田 武麿
(宗教学)

大学史編纂研究班は、「近代における大谷大学の成立と展開の研究」を研究課題として、1991年度以来の「明治期大谷大学史研究」の整理と並行して、新たに「大正期大谷大学史研究」に着手した。

1994年度のはじめに際して、研究の目的と意義を「大学史」とは、単に大学の過去を掘り起こすものであってはならない。大学の過去と現在と将来とを展望する問題意識をもって編纂されるべきものである。そのような大学史が編纂されることによって、建学の目的や理念が大学の歴史を縦に貫いていることを確かめることになるのである。また、それこそは、本学の新たな改革の指針をも示すことになるのであろう。

と確かめ、前年度を承けて、研究をさらに推めた。

まず、「明治期大谷大学史研究」については、研究員各自が、すでに役割分担されたテーマごとに、原稿をとりまとめる作業を行なった。その項目は明治期の教学史「明治期の宗門と大学の関係」「明治期の諸大学史」「明治期の教育研究組織」「略年表整理」「明治期大谷大学史研究の総括」である。

「大正期大谷大学史研究」については、その課題を、大正期に於ける大谷大学の組織の研究・大正期教学史の研究・大正期略年表作成のための研究に大きく分類し、これをさらに明治期の研究に順じて項目を分けて、各研究員に分担を振り分けた。そして、上記の明治期の大谷大学の研究を併せて、大学史刊行の企画をすすめることを目指すことにした。

会議ならびに研究会を下記のようにとりおこなった。

1994年

6月17日(金)12時 博綜館小会議室1

議題 今年度の課題

内容 明治期の大学史の原稿化と大正期の大学史編纂研究について話し合った。

7月19日(火)16時 博綜館小会議室1

議題 各研究員の研究計画について

内容 大正期大学史の基本的資料をファイルに綴じ込み、それを各研究員が持ち帰り精読して、夏休み明けに研究員各自の研究テーマを決めることを申し合せた。

10月4日(火)12時 博綜館小会議室1

議題 研究計画

内容 1)1994年度中に明治期の大学史を完成させることの確認。

2)大正期の大学史の研究方法について協議。明治期の研究で各自担当した事項を以て大正期の研究を進めることとする。

11月30日(水)16時10分 博綜館第5会議室

研究会

講師 福島和人氏(本学非常勤講師)
「大正期真宗の諸相」

内容 歴史叙述編纂の意義・歴史観の確かめ・史料の範囲など

参加者 研究員8名・研究補助員2名・本学学生7名

これによって、次年度の「大正期大谷大学史研究」原稿執筆に取りかかる準備をした。

(三明智彰記)

特定研究

国際仏教研究 —諸外国における 仏教受容の様相の研究—

研究員・チーフ 多田 稔
(国際文化学)

本研究班は「仏教を通じての東西の文化的対話」を主たるテーマとして研究をすすめてきた。1994年度は、1993年度の研究成果に基づき、1993年8月に本学において開催された国際真宗学会第6回大会の総括を主なる

研究課題として活動した。つまり大会のプロシーディングの作成と大会を総括的にまとめた報告書の作成である。これらの意義については次のように確かめられている。

「大乘の至極 浄土真宗」と銘打って、真向から宗教界に問いかけるテーマのもとに行われた本大会の、それぞれのパネル対論や講演、そして多くの日英両語で行われた研究発表を、ただそれだけをまとめて大会報告書として冊子にするだけでいいのだろうか、という思いであった。

(中略) 考えてみれば、この大会において出された問題こそが、現代世界において、考え抜かれ且つ実行されねばならぬ根本的で最も重要なことなのではないか。それらのテーマこそは、人間活動の殆どすべての諸問題を網羅していたのであるから。この思いは参会者に共通したものであった筈だし、そうであるとすれば、それぞれの事情で当日参会出来なかった方々へも、もっと整理した形でお伝えすべきものなのではないか、と。こうした共通の思いから出発して、大会の内容を正確に報告するのはもちろんであるが、我々自身ももっと問題点を掘り下げて、それぞれの覚悟をもって、英語で言われたものを日本語へ、日本語で語られたものを出来るだけ英語へ、そして私たちなりの理解内容を整理して、それぞれの問題を論じ合った後、まとめて出版することになったのである。」

(多田稔「大乘の至極 浄土真宗 国際真宗学会第6回大会報告」序文より転載)

大会を総括する方針について、検討を重ねた結果、報告書は大会テーマに基づいた2つの公開講演と4つのパネルディスカッションについてまとめることになった。また報告書の題名は「大乘の至極 浄土真宗 国際真宗学会第6回大会報告」に決定された。パネルの論文は原則として、大会にフルペーパーとして提出されたものを収め、英語で提出された論文については本研究班の研究員が日本語に翻訳した。公開講演ならびにパネル3とパネル4のレスポンスは記録テープなどに基づいてまとめた。また4つのパネルディスカッションについて研究会を重ね、それぞれについて担当者が総括した。

なお当該年度において、プロシーディングは作成し刊行することができたが、諸般の事情から報告書の作

成は次年度に引き継がれることになった。

また上述の研究に加え、本年度も、初年度の計画に基づき以下の基礎的研究を行った。

1. 海外の研究者を招いての研究会
2. 研究員による定期的な研究会
3. 海外の学会への研究員の派遣
4. 欧文の仏教関係書籍ならびに論文の収集とデータベース化

1. 海外の研究者を招いての研究会

5月25日(水)16:00 第2会議室

フレズノ大学の学生を迎えて

講師 安富 信哉 研究員(本学教授)

司会 多田 稔 チーフ(本学教授)

6月24日(金)16:10 第5会議室

アメリカにおける仏教研究の現状と問題点

講師 ウンノ・タイテツ 教授

(スミス大学)

司会 多田 稔 チーフ(本学教授)

7月11日(月)16:20 第2会議室

シカゴ仏教について足利先生に聞く

講師 足利 祐敬 師

(シカゴ仏教教会)

司会 多田 稔 チーフ(本学教授)

7月25日(月)16:30 第2会議室

慈雲尊者の仏教における肉体と社会化

“Body and Society in Jiun Sonja's Buddhism”

講師 ポール・ワット 教授

(米国デュポア大学)

司会 多田 稔 チーフ(本学教授)

9月30日(金)16:15 第4会議室

インドから見た日本(真言)寺院における供養と護摩

Puja and Homa in Japanese (Shingon) Buddhist Temples with Indian Perspective

講師 カルバカン・シャンカルナラヤン 博士

(K. J. Somaiya Centre of Buddhist Studies)

司会 多田 稔 チーフ(本学教授)

10月12日(水)18:00 学生談話室
デンマーク教育庁を迎えて
司会 多田 稔 チーフ(本学教授)

「国際真宗学会第6回大会」パネル4のま
めについて
講師 安富 信哉 研究員(本学教授)

12月16日(月)17:30 第2会議室
シルクロードにおける少数民族とその文化
講師 胡 振華 教授(中央民族大学)
司会 多田 稔 チーフ(本学教授)
通訳 劉 建 氏(本学非常勤講師)

2. 研究員による定期的な研究会

6月1日(水)12:00 小会議室1
議題 1. 本年度の体制について
2. 本年度の課題について(1)

7月13日(水)12:00 小会議室1
議題 1. 本年度の課題について(2)

7月25日(月)13:00 小会議室1
議題 1. 国際真宗学会第6回大会のま
とめについて(1)

10月5日(水)12:10 小会議室1
議題 1. 国際真宗学会第6回大会のま
とめについて(2)

11月2日(水)12:10 小会議室1
議題 1. 国際真宗学会第6回大会のま
とめについて(3)

11月29日(火)16:10 小会議室1
「国際真宗学会第6回大会」パネル3のま
とめについて
講師 ロバート・F・ローズ 研究員
(本学専任講師)

12月13日(火)16:10 第5研究室 分室1
「国際真宗学会第6回大会」パネル2のま
とめについて
講師 樋口 章信 研究員
(本学専任講師)

12月22日(火)13:00 小会議室1

3. 海外の学会への研究員の派遣

The 8th European Shin Conference

8月8日から8月10日まで、オーストリアのウィーン
で開催された第8回ヨーロッパ真宗学会に樋口章信
研究員が参加した。大会テーマは「聞の道(The Way of
Hearing)」であった。

1994 AAR/SBL Annual Meeting

11月19日より11月22日まで、アメリカ合衆国のシカゴ
で開催された1994年度アメリカ宗教学会年次大会に渡
辺啓真研究員が参加した。

4. 欧文の仏教関係書籍ならびに論文の収集とそのデ ータベース化

本年度も資料収集とデータベースへの入力という基礎
作業を継続して進めている。あわせて1994年度は、過
去に収集された約5000冊余の欧文書籍のデータベース
化が終了したことを受け、データをネットワークの上
で公開するための基礎的体制をほぼ整えた。また約100
種におよぶ欧文雑誌論文についてはデータベース公開
に先立ち一層の充実を期すため欠本調査などを行った。
(事務担当 加来記)

委託研究

真宗史料研究

—東本願寺近世近代史料の整理
ならびに『真宗史料叢刊』の刊行—

研究員・チーフ 名畑 崇
(日本仏教史学)

本研究は「東本願寺近世近代史料の研究と翻刻並
びに出版」の課題のもとに1991年に発足した。その際、
研究の意義と目的について、つぎのように記している。
「近世近代の東本願寺関係史料(大谷派宗務所史料を
含む)が未整理または未公開・未公刊である。現今、
日本史研究の上で注目されている近世・近代の国家と

宗教のかかわりは、これら史料群を解明していくことにより明らかにしうるであろう。また宗内近代史の検証、大谷大学史の研究においても、これら史料の公開・刊行は急務とされている。このような内外の要請に早急に、かつ確実に応答してゆきたい」

その際、東本願寺より園林文庫の調査・整理と目録作成の業務を委託され、あわせて東本願寺記録所文書等の翻刻・刊行をめざすこととした。以来、史料調査と目録作成、史料解説および刊行を総合する形で、作業と研究を鋭意行ってきた。園林文庫史料は全部でダンボール箱182個分あり、これまで主に文書類の調査・整理を進めてきた。文書・冊子の類を一点ごとに名称・年次・発給・形状・数量・内容等を精査してカード（調査票）に記入し、まとめてコンピュータ入力により整理し「目録」編纂の基礎づくりをしている。

史料の研究と翻刻並びに出版については、①『東本願寺家臣名簿』②『申物帳』③『粟津日記』等すでに編集・対照・翻刻等の作業が終わり、原稿化され、手はずさえ調べば①から順次刊行できる状態にある。

以下、本研究の進捗状況を、園林文庫の調査・整理と『東本願寺家臣名簿』作成に分けて報告する。

1953（昭和28）年、仮目録として作成された『園林文庫調査目録』に基づき、史料の詳細な内容確認の調査を始めてから4年目が経過した。これまでのカード整理の作業状況を下表に示そう。

年度	ダンボール数	S28・旧目録点数	カード作成数	達成率(ダンボール・旧目録点数)
91年度	21	766	3,567	11.5%・14.4%
92	20	640	4,787	10.0%・12.1%
93	10	632	3,350	15.5%・11.9%
94	23	705	5,966	12.6%・13.3%
91～94	74	2,743	17,670	40.7%・51.6%

※全ダンボール数：182箱 全旧目録点数5313点

一概に作業の達成は計りがたいと思うが、ダンボール数・旧目録点数からの達成率からすると、4年間で半分近くのカード化が行われたとあってよいだろう。また94年度に限って言えば、数字からみると作業成果はあがってきているといえる。しかし古文書読解という特殊能力を有する作業のため、昨年度こそ学生の確保はうまくいったものの、今後これ以上に成果をあげていくことは作業員の確保を考えると、そう容易なこと

ではない。またより一層の作業効率ということが望まれるが、史料の性格上、調査の安易な簡略化は避け、現行の方式を守るべきものと考えられる。そのあたりの状況も今後の検討課題となろう。

カード化の作業も半分近く終わり、コンピュータ入力による整理、「目録」などの編纂も考えたまとめの作業も今後必要となつてこよう。検索のための内容分類の検討、カード記入漏れなどのチェックなども、そろそろ体制を組まなくてはならないだろう。

「園林文庫整理カード」コンピュータ入力作業状況について

入力作業は従来通り、入力作業マニュアルをもとに行っている。作業内容に関しては大きな問題はなく、個々の例外についても、基本的には現在のデータ書式にしたがって入力しており、問題点があれば、その都度マニュアルとの調整を行うようにしている。昨年度の全体会議では、入力作業専門スタッフの増員が指摘され、本年度は、データ入力専属という形で2名の作業員を確保した。また本年度には、新規にデスクトップ型とノート型PC各1台ずつが導入されて、ハード面においても環境が整いつつあるといえよう。結果的には、昨年度入力データ総件数<2,013件>（第45箱<1,595件>、第66箱<103件>、第15箱の内<315件>）に比べて、本年度は約1.7倍（約3,500件）の入力件数となった。以下、本年度入力「箱」および入力データ件数の内訳を列記する。

第13箱<504件>、第15箱<1,014件>、第16箱<635件>、第18箱<282件>、第23箱<590件>、第27箱<35件>、第28箱<439件>、以上の合計<3,499件>

このように入力データ件数に関しては、順調に一定の成果を上げてきているといえよう。これに昨年度までの入力件数を加えると、約6,500件のデータを入力した計算となるが、「園林文庫整理カード」枚数全体からは、未だその半分にも達しておらず、現在の入力件数は必ずしも十分な数字であるとはいえない。したがって、来年度はさらに一名の入力作業スタッフを確保する予定である。またハード面の整備についても、将来的な状況を見越して、データの共有化や通信ネットワークなどの問題を考えていく必要がある。たとえば、データの提供・共有化に関していえば、年代や各事項の検索は必須であるが、すでに現時点においても、入力書式やソフト面でその問題点と限界が指摘されており、ソフト面の環境整備もまた考えていかなければなら

らない。入力作業とともに作業環境の整備といった課題を含めて、より有効なものを模索していく必要がある。

東本願寺家臣名簿作成

本年度は製版、印刷といった出版に向けての具体的な作業を想定し、昨年度中に一応の完成をみていた原稿の整理、補訂を行った。

本名簿の書物としての体裁は既に『研究所報』第32号に示したとおりである。ここでは編集方針、及び記述の体裁について若干の報告をしておきたい。

本名簿は、『家臣系譜』、『家臣系譜(享保14年、系図のみ)』(以上図書館蔵稲波家文書)、『家中補任』、『石原本家臣系図(仮題、原題不詳)』(以上園林文庫)、『三代相思之調書』(記録所文書)の五本を底本として各家系図を作成し、各人物ごとに史料を収集し、原稿化した。記述形態はおおむね先の宗学院本(昭和13年)に倣うが、記事の出所を明確にするため、各史料において同一の記事がある場合も削除、統一といったことはせず、原本通りに列挙し、記事の末尾に史料名を記すこととした。記述は『家臣系譜』を根本とし、記述方法・内容が酷似している『家中補任』をその補完史料として扱い、記事末尾に史料名を順に記した。『家臣系譜(享保14年)』と『石原本家臣系図』は『家臣系譜』には見られない人物等の新たな事項が収録されている場合のみ全文を掲げ、『家臣系譜』・『家中補任』と内容の上で重複する記事についてはこれを略した。『三代相思之調書』については、他とは別系統の史料であるため、記事内容に関わらず全文を掲げ、同系統の別本二本(所報30号既報)により補訂し、そのむね記した。また養子縁組等の理由により複数の家に記述が存する人物については、死亡時の名告の項目に一括して記事を掲げた。系図は稲波家文書所収の二本及び『石原本家臣系図』所掲の系図を総合し、更に不明瞭な点については各史料の記事内容から推量して作成した。

以上の方針に基づいて、原稿の整理を行ってきたが、従事する人員の減もあり、当初の予定よりも作業の遅延がみられる。また、名簿の本文編の刊行を最優先するという出版計画全体の方針もあり、関連史料の検索、索引付録編の編集については作業を見合わせている。

委託研究

西藏文献研究

—大谷大学所蔵の北京版大藏經

および蔵外文献の研究—

研究員・チーフ 小川 一乗
(仏教学)

本研究は、大谷大学図書館に収蔵されているチベット語文献を整理・研究すると共に、貴重な文献を内外に紹介することを目的とするものである。昨年度は、丹殊爾勘同目録の続刊の原稿作成と、パーソナルコンピュータ・マッキントッシュ用のチベット語システムの開発という二つの作業を遂行した。

本学図書館所蔵の蔵外文献に関しては、われわれは既に『大谷大学図書館所蔵西藏文献目録』と『大谷大学図書館所蔵西藏文献目録索引』を刊行してきた。またその中の希観書の影印出版をも開始した。希観書の刊行作業はコンピュータ入力による出版という方法をも考慮した上で、今後継続することを考えている。北京版の丹殊爾勘同目録の作成作業に関しては、既に讚頌部、秘密部、般若部を刊行し、現在、諸経疏部、唯識部、阿毘達磨部、律疏部、本生部、書翰部、因明部、声明部、医方明部、雑部に対する勘同目録の原稿を準備中である。1995年度中にこれらに対する勘同目録を刊行する予定である。

マッキントッシュ用のチベット語システムの開発作業は本年も引き続き行なわれた。昨年度は、特に効率的なシステムを完成するために、サンスクリット語を音写するために使用される、縦に結合するチベット語文字の実際例や使用頻度を、Mahāvīyūtpattiや、今枝由郎・福田洋一両嘱託研究員によって準備された資料に基づいて調査した。

今年度はその調査結果に基づき、より効率的かつ実用的なシステム作りに向けて作業を行なった。そして一応の完成をみた第一次評価版を数人のチベット研究者に配布し、実際に使用してもらった上での感想や意見の提供を求めた。また11月に筑波大学で開催された日本西藏学会大会では、このシステムの内容、並びに

開発状況を報告し、システムをより一層改良するための意見を求めた。本システムは、第一次評価版に対する意見を求めたチベット研究者や、西藏学会大会の参加者たちから概ね好評をもって迎えられたが、幾つかの問題点も指摘された。それらの主たるものは以下の如くである。

1. 《キーのポジションに関して》 ña、ñaに該当するキーや、結合キー（文字を縦に結合させるためのキー）の位置などの問題。
2. 《フォントに関して》 文字の形、大きさ、高さなどの問題。
3. 《対応ソフトが少ないこと》 ワープロソフトで実用的なものがAllScriptのみであるという問題。

これらの問題を考慮して更にシステムを改善し、第二次評価版を作成してそれを2月に配布した。

1. の《キーのポジション》の問題は、チベット文字のキー配列には、欧文文字のqwertyキー配列に相当するような、確立された配列方式がないという状況を反映している。評価版で試みた配列法「Tibetan US キー配列」では、子音の大半がWylie方式によるローマサイズのローマ字キーの位置に配置されているが、幾つかの子音は任意に配置されている。また、「Tibetan US キー配列」では有気子音を入力する際には、shiftキーを押しつつ、その有気子音に対応する無気子音のキーを打つという操作を行わなければならない。これらの問題を解消するために新たに「Otani USキー配列」を考案中である。このようにチベット文字のキー配列に関してはまだまだ工夫の余地が残されている。現在のものを改良するためには、文字及び文字の組み合わせの使用頻度を詳細に調査する必要がある。

2. の《フォント》に関する問題については、福田洋一氏を中心に、フォントの高さを低くしてできるだけ高い縦結合を、しかも綺麗な字体で表示することを可能にすべく改善を行なった。それと共に、システムやフォントのバグ調査を行なった。更にシステムの実用化のための試みとして、西藏文献目録・金写版西藏大蔵経目録の入力を、研究補助員と大学院生アルバイトを中心に、昨年度に引き続き行なった。

3. の《対応ソフトが少ないこと》については、依然これといった解決策は見つかっていない。

今後は、第二次評価版に対する意見や感想を回収し、それらを参考にして、'95年度中に予定している正規版のリリースに向けての準備作業を行なう予定である。

その作業の一環として、西藏文献目録・金写版西藏大蔵経目録の入力の完成を急ぎたい。更にシステムの開発に対応してチベット語のソーティング法の研究にも取り組む予定である。

委託研究

大蔵経学術用語研究

—『大正新脩大蔵経』寶積部関係典籍 における学術用語の研究—

研究員・チーフ 鍵主 良敬
(仏教学)

本研究は、一昨年度（1992年度）から三年計画で始められたものであり、今年度はその最終年度である。本研究の主な目的は、既刊の『大正新脩大蔵経索引第六卷寶積部』の内容を現代的な視点から再検討して、改訂新版を出版することである。本研究の具体的なねらいと方法については既に報告したので（『研究所報』No.30）それを参考にしていきたい。

最終年度にあたる本年度は、昨年度までの研究成果をふまえて、それを具体的にどのような方法によって新しい索引に生かしていくかという点を中心に研究を進めていった。

『大正新脩大蔵経索引』は、一応索引という名称を持ってはいるが、一般的な意味での索引とは大いに内容を異にしている。それは、本索引が企画された初めの意図を反映しているからである。つまり、本索引は一般の索引のように必要な用語を探し出すためだけにあるのではなく、専門的かつ広範な内容を持つ東洋の英知の結晶とも言うべき『大正新脩大蔵経』を広く人類に開放すべく、その中から重要な用語を選んでそれに解説を加えることで、一般の人々にも利用できるようにするために企画されたものなのである。それ故、索引本編の見出し語としての情報の中にもそのために必要ないくつかの事柄が記されているし、索引の構成もそれを生かすように工夫されているのである。ちなみに『大正新脩大蔵経索引第六卷寶積部』の構成は次の通りである。

- 1、収録典籍解題
- 2、凡例
- 3、音次索引
- 4、分類項目別索引
- 5、検字索引

これまで索引本編と称してきたのはこの中の音字索引のことである。音字索引とは、大蔵経中の学術用語の所在と、その言葉はあらかじめ決められた30項目の中のいずれの内容に相当するのかを示すものを一単位として、それを用語の第一番目の漢字ごとにまとめて、それらを五十音順に配列し、同様に第二字以下も分類配列したものである。また分類項目別索引とは、一つ一つの用語を前述のように30項目に分類したものを、それぞれの項目ごとに五十音順に並べなおしたものである。これによって、大蔵経の中に様々な形で存在する種々の用語のおおよその意味を知ることができると同時に、内容的に共通する用語はほかにはどのようなものがあるのかということを知ることができる。さらに検字索引は、音字索引の配列の基準となった、それぞれの用語の第一番目の漢字を字画と四角號碼によって検索できるようにしたものである。これらの各索引も本索引を構成する重要な要素なのであり、一つ一つが正確でなくてはならない。昨年までは索引の本編を点検することが主な課題であったので、用語選抜の確認と誤字脱字などの点検をするために、用語が抜き出された文献自体を研究する事が中心であった。それは索引全体でいえば、見出し語に関する研究を主な課題としてきたということである。従ってそれらの成果をどのような形で新版に表現するかという点と、今述べたような本編以外の他の部分の点検が本年度の主な課題であった。これら諸課題をほぼ月2回の研究会を中心に検討したわけである。その過程と内容は幾分細かい点に互るので、限られた紙面で紹介することはできない。従ってここでは省かせていただきたい。

おおよそ、以上のような経過を経て、現行の索引に関する様々な問題を一通り点検した。その成果は、新版『大正新脩大蔵経索引寶積部』として近い将来出版される予定である。

このほかに、昨年度から開始された、『大正新脩大蔵経収録基本典籍解説』に関する研究のその後についても紹介しておこう。この研究も基本的には『大正新脩大蔵経』を如何にして開放していくかという課題の延長上にあるものである。この研究が始められた経緯に

ついては、『研究所報』No.32に紹介しておいたのでそれを参照していただきたい。なお、『研究所報』No.32では、原稿をまとめていた時点で既に本研究が開始されており、若干報告しすぎた点もあるが、改めて1994年度の研究経過を報告しておきたい。

この研究は、本学独自のものではなく、大蔵経学術用語研究会を組織する仏教系六大学の共通の課題である。従って本学は、全体の一部を分担する形でこの課題と関わっている。それ故、本学内部の調整ばかりでなく、六大学の緊密な連携を計っていかねばならないことは言うまでもない。1993年度には何回かの会合が、出版社のある東京でもたれ、膨大な量にのぼる『大正新脩大蔵経』の収録典籍の中から基本典籍と考えられるものを選び出し、それをどのような形で解説していくのかという点までの調整が為された。そこで決定された基本的な編集方針と本学の分担課題は、以下のようなものであった。

- 1、一典籍を1200字程度で解説し、数典籍をまとめて解説しない。
- 2、初学者及び一般の読者を対象とし、わかりやすい表現を心がける。
- 3、本学の執筆分担は今まで索引編集に携わってきた「寶積部」「経集部下」「毘曇部下」「経疏部二」「論疏部二」「史伝部上」「統論疏部一」「統諸宗部二」「統諸宗部六」の中から67典籍とする。

そして、本学が責任を持って執筆を分担していくために執筆分担者と分担典籍を決定し、1994年6月6日に執筆分担依頼の会合を持った。その後、執筆分担者の並々な努力によってそれぞれの原稿ができあがってきたので、内容や表現の統一を図るための検討会を持った。実際に全員で一つの原稿を読み合わせてみると、執筆者個々の個性が現れており、随分と難解な表現になっている場合や、書いた本人にしかわからないような表現になっている場合もあり、わかりやすい表現ということがこれほどにも難しいことであったのかと再認識させられた。ある時には、我々研究者は専門用語を駆使して単純なことを難しく表現しているのではないかとさえ思わせられるようなこともあった。このような検討会を数度となく繰り返し、その結果をまた原稿に反映しながら段々と原稿の完成度を高めていったわけである。1994年度末の段階で、ほぼ本学の分担課題を整理し終わり、六大学の間での細かい調整を待って出版する段階となっている。

1994(平成6)年度「一般研究」研究結果概要

共同研究

日本思想の歴史的・ 総合的研究

研究代表者 大河内了義
(ドイツ文学)

Überwegの『哲学史』5巻と言えばドイツ語圏で、またそれとの関連において哲学を志すものにとって、長い間必携の書とされてきた。その版權を所有するスイスのバーゼルにある出版社Schwabeが現在この著作の全面的な改訂・増補を実施しており、すでに十数巻が刊行されている。

そのSchwabe社から数年前に、新版刊行に際して、ヨーロッパの枠を越えて、インド、中国、日本の哲学史を、それぞれ一巻ずつこれに収めたいという希望が表明され、日本の部分に関する協力の要請があった(因みに、旧版では「アジアの哲学」としてわずか二頁の記述があるのみ)。

もしこの仕事の実現すれば、ドイツ語文化圏で、あるいはそれを通して、哲学や思想の研究に携わる人々に対して、日本思想への橋渡しができることになり、その意義は極めて大きい。

これにはしかし多大の困難が伴う。一口に日本の哲学ないし思想といっても、古来からの神道あり、儒教あり、何よりも仏教があり、加えて、そうした諸思想の上に、あるいはそれと並行して、ヨーロッパ思想に触発されて形成されてきた明治以降の哲学的営為がある。したがって日本の思想全体を歴史的に跡づけ、学問的に整理し、二次文献表を作成し、しかもそれをドイツ語で表現することは、個人では不可能に近い仕事である。

しかしながら逆に、大谷大学こそ共同研究を通してこの仕事を成就させるのに最もふさわしい場であり、またその義務があると考えられる。

そこで真宗総合研究所の活動の一環として共同研究をすることになり、共同研究者として名前をつらねたメンバー以外にも多くの人たちの参加をおおぎ、原則

として毎月一回、毎回十人前後の研究者が集って、文献に当り、討論を重ねた。

先ずは、日本思想ないし思想史に関する先達の著作を参考にしつつ、方法論を模索することになり、以下のような討論をおこなった。

第1回(1994年4月27日)は、家永三郎著『日本文化史』(岩波新書)をたたき台として討論したが、この著作では十分とは言えないという結論に達した。

第2回(5月25日)は、丸山真男著『日本の思想』(岩波新書)及び『忠誠と反逆—転形期日本の精神史的位相』(筑摩書房)、とりわけそのうちの「歴史意識のく古層」の章と加藤周一著『日本文学史序説』、特にその序章に当る「日本文学の特徴について」及びその独訳を対象として討論した。その際参加者の一人からÜberwegの著作には、古代哲学を述べるに当って「哲学」の概念規定をしているが、この共同研究をすすめる際にも、何をもって日本の「哲学」ないし「思想」とするかという規定が必要ではないのかという重要な発言がなされた。

第3回(6月22日)は、これを受けてLydia Brüll: Die Japanische Philosophie - eine Einführung (Wissenschaftliche Buchgesellschaft, 1989)を取り上げ、ドイツ語圏の学者が何をもって「日本の哲学」と考えるかを探ってみた。これを見る限り、儒教及び仏教の思想を時間的・宗派的に羅列し、明治以降の哲学も1945年までたどるだけであって、われわれの願うものとは遠くへだたっていると考えるよりほかなかった。

第4回(7月21日)は、鈴木大拙著『日本的靈性』を対象に議論した。

第5回(9月28日)、第6回(11月2日)は、古田光・子安宣邦編『日本思想史読本』(東洋経済新報社)及び末本文美士著『日本佛教思想史論考』(大蔵出版)を取り上げて討論した。この辺りまで来て、日本のさまざまな思想を一貫した思想「史」として考えることができるのか、という重大な問いに逢着した。

第7回(12月19日)は、そこで方法論をめぐって討論がなされた。

第8回(1995年2月19日)には、思想の歴史を述べる場合に何をどう取り扱うかについての具体的なモデルとして、大桑斉教授にお願いして「仏教的世界としての近世」という報告をしていただき、日本近世における文芸—思想—哲学の関連とそれと仏教との関わり

について討論を重ねた。

第9回(3月13日)には「哲学」の源に帰って、「古代ギリシアにおける哲学という名前と概念」というテーマで箕浦恵了教授に報告をお願いし、討論した。

上記のような共同研究を経て以下の二点が明らかになった。

1. 日本思想全体を一貫した「思想史」として記述した著作はこれまでのところ見当らず、個別研究か、個別研究のクロノジカルな羅列もので、何よりも思想を思想史として扱う方法論が確立していないのではないか。

2. 他方「哲学」の概念がヨーロッパにおいても変容しており、特に現代において哲学におけるパラダイグマの変容がおこっているのではないか。

したがって今後の課題は、一方で「哲学」という概念の吟味、他方で日本の思想を思想として、その意味でまた「思想史」として扱う方法論を確立することである。

幸いこの共同研究は1995年度へ継続することを認められたので、次年度は学内外の協力を求めて、それぞれの研究分野における「思想史的問題点」を提示し、それに基づく討論を重ね、文献を渉猟し、問題の所在を明らかにすることに努める。

共同研究

唐代釈教文の研究

研究代表者 河内 昭円
(中国文学)

唐代の文人によって撰述された仏教関係の文章、すなわち唐代釈教文は、そのいずれもが唐代の文学史・仏教史・社会史上の諸問題を解明するための最も重要な基礎資料である。しかし残念ながらこれらの諸文を総合的に注解した書物はなく、研究者それぞれが当面する問題の処理にあたって諸文の読解に苦慮しているのが実状である。本研究はそれらの唐代釈教文に注解をほどこし、将来に刊行公開することを目的とするも

のである。

平成六年度は、盛唐から中唐初期にかけての文人李華の釈教文十一首を読み終えた。読了した李華の釈教文十一首とその担当者を列挙すれば次の通りである。

揚州竜興寺経律院和尚碑(河内昭円)

台州乾元国清寺碑(大内文雄)

故中岳越禪師塔記(佐藤義寛)

杭州開元寺新塔碑(佐藤義寛)

潤州鶴林寺径山大師碑銘(西尾賢隆)

左溪大師碑(山野俊郎)

潤州天郷寺大徳雲禪師碑(若槻俊秀)

東都聖善寺無畏三蔵碑(織田顕祐)

杭州余姚県竜泉寺大律師碑(今場正美)

衢州竜興寺律師体公碑(渡部 洋)

荊州南泉大雲寺故蘭若和尚碑(島津京淳)

注解においては整理の都合上まったく便宜的に『全唐文』を基本テキストとして用いたが、『唐文粹』・『文苑英華』および四部叢刊・四庫全書所収の各『李遐叔文集』をもって校勘した。この時代の作者を扱う場合、テキストの選定に苦しむのが常である。『唐文粹』を善本とし、『文苑英華』がこれに次ぐとするのが一般であるが、『唐文粹』が収めるものは少なく、李華に限っていえば、『文苑英華』また必ずしも善いとはいえない。したがって校勘作業はおおいに難渋し、ときに読解不能の箇所も存在する。

「揚州竜興寺経律院和尚碑」は碑主を懐仁とするが、『宋高僧伝』は明らかにこの文章に依りながら法慎伝を立伝するという問題の多い碑文である。「潤州鶴林寺径山大師碑銘」は牛頭鶴林派の祖鶴林玄素伝の根本資料であり、天台の左溪玄朗のための「左溪大師碑」、北宗の嵩山普寂に承けた法雲のための「潤州天郷寺大徳雲禪師碑」、密教の善無畏のための「東都聖善寺無畏三蔵碑」、『宋高僧伝』はその伝を立てないものの承遠系の浄土教に関わる恵真のための「荊州南泉大雲寺故蘭若和尚碑」など、いずれもこの期の仏教諸事情を考えるうえで第一級の重要碑文である。これらは当然先学が夙に注目したものであるが、難解な文章を目のあたりにするとき、その労苦のほどがあらためて偲ばれる。

李華、字は遐叔。生卒年は明らかでないが、開元二十三年(七三五)の進士及第であり、監察御史・侍御史・礼部員外郎・吏部員外郎を歴任した。安祿山の乱後は江南に左遷され、むしろ文章家としてこの地に重きをなした。蕭穎士・元結・独孤及・梁肅らとともに

初期の古文家として文学史上に名高い。

天台中興の祖荆溪湛然の『止観大意』一卷は李華のために撰述されたとはよく知られた逸話であるが、読了したその釈教文を通して見る李華の仏教は、天台宗・律宗・北宗・牛頭宗との関係が密接であるといえる。

李華が生きた時代の仏教は、各宗各派が錯綜してきわめて複雑であるが、あえてその特徴を二点に集約してみると、第一は、禅学における南北二宗の抗争の渦中において、李華が興味を示した上記各宗が連携を保ちながら南宗に対抗した点にある。第二は、その連携集団には天台を中心として智顛偽撰『浄土十疑論』の成立背景を思わしめるほどに、浄土教に対する志向のたかまりがあるという点にある。このような現象は独孤及・梁肅らの文章にも共通して現れることがらで、研究の延長が認められた今年度はこれらの古文家の碑文から読み始めている。

なお、毎週木曜日開催の研究会において、常に竺沙雅章教授の有効な助言を得ていることを付言しておく。

共同研究

仏教保育研究

—その現状・理念・

教育体系について—

研究代表者 佐賀枝 夏文
(社会福祉学)

仏教保育研究班は第一段階の研究調査作業として、資料収集（関係の書籍）と関係機関（大谷保育協会、日本仏教保育協会）との交渉を精力的に行なった。同研究をすすめる基礎となる資料については一部の入手困難なものを除いて、所期の計画に基づいて順調に入手できた。また、関係機関との連絡調整としては、とくに大谷保育協会と連絡調整をはかることができたことは、当研究班にとって意義のあることである。同協会と連絡調整を継続した結果、連携のあり方、将来の展望について十分に交渉を重ねることができたといえるであろう。同協会と当研究班との関係は、今後の展

望としては教育研究機関として本学幼児教育科をどのように位置づけ、役割が果たせるかということなどが新たな課題となるだろう。

研究調査の進捗の状態は、第一に取り上げたテーマとして「仏教保育者の養成」に関することに焦点をあて研究をはじめているところである。

佐賀枝レポートでは、仏教保育者の先覚者の発掘を手掛かりとして、その足跡と実践から仏教保育の実像を浮き彫りにする作業がすすめられている。現在のところ九条武子（浄土真宗本願寺派）、奥村五百子（真宗大谷派）、瓜生岩などの先覚者の業績の発掘作業を終えたことが報告されている。これらの発掘作業から問題化したことは、明治の「子育て」は家庭で行なわれていたのたいして、現在の「子育て」が家庭からすでに「外部化」しているという違いをどのようにクロスできるかということである。また、養成校卒業後の現任訓練の現況について各宗派の調査を終えて、園長、主任、新任単位の集計がほぼ終えたと報告されている。

大城レポートでは、保育実践における「仏教保育者のあるべき姿」に焦点をあて、着実な研究が進められている。仏教保育者に求められる資質を、養成という観点から、どのように教授できるか、また、覚知されるものであるかが今後の研究課題であるとの報告がされている。

当研究は、幸いにも1995年度へ継続がみとめられたため、引き続いて、大谷保育協会の加盟園において、宗教カリキュラム、宗教行事がどのように取り込まれてきているのか、調査の準備をすすめている。会員660ヵ園への配布資料の一部もでき、調査項目の細目ができ上がりしだい発送にかかりたいと考えている。年度内に宗教カリキュラム、宗教行事の調査を実施できれば、仏教保育研究班の研究計画がほぼ予定どおりに進捗しているといえるであろう。

共同研究

近代における仏教の展開

一清沢満之の思想形成の

研究と基礎資料の集成一

研究代表者 安富 信哉
(真宗学)

本学の学祖である清沢満之が、世界的な視野から仏教をとらえ、世界に仏教を顕揚しようとしていたことは周知のところである。このような課題を担った清沢の思想的課題は、その思想が形成される背景をうかがうことによって、はじめて明らかにすることができるであろう。今日、ある意味で、かつてないほどさまざまな視点から、近代において清沢が果たした役割についての論議がなされている。しかし、それらの論議は必ずしも清沢の思想の背景について厳密な資料検討、もしくは十分な思想的読みを通してなされているとは言いがたい。

このような現状をふまえて、本研究は清沢の思想形成およびその背景を検証することを目的とするものであり、1991・1992年度共同研究「清沢満之の研究—信仰・思想・実践—」(研究代表者 神戸和麿教授)の成果を受け継ぐ位置にある。ところが、従来清沢研究の基本的資料であった『清沢満之全集』(法蔵館刊)が絶版になっており、多方面からの研究に耐える基礎資料を収集し作成することも併せて研究の目的とした。

本研究は、1993年度から2カ年計画で始められたが、一年目は清沢研究のための基礎資料を収集し、コンピュータに入力していくという作業を主にして進めた。その際に、これまでに刊行された清沢の論文を対校して、検討を加えた結果、清沢の研究を行うためには信頼に足る基礎資料の作成が急務であることが確認された。その成果をふまえて二年目の1994年度は、前年度より着手した『精神界』に掲載されたものを中心に、清沢の論文に検討を加えていった。この成果の一部については、『研究紀要』No.13に掲載される予定である。本研究を手掛かりにして、大谷大学による『清沢満之全集』刊行が本格的に計画されることが今後の課題であると思われる。

また、本研究の主要な目的である清沢の思想形成およびその背景を検証していくために、資料検討会を重

ねた。また、仏教学、哲学、倫理学などの専門家の視点から清沢の課題を学ぶ研究会を行った。それは、東洋の仏教や儒教の伝統、近代において新しく紹介された西洋哲学などが渦巻く中で生きた清沢の課題を浮き彫りにしようとする試みであった。研究会の詳細は、下記の通りである。

1995. 3. 1

講師 織田顕祐氏 課題「唯思想と精神主義」

1995. 3. 8

講師 池上哲司氏 課題「清沢満之の倫理学」

門脇 健氏 「清沢満之におけるヘーゲル受容」

個人研究

近世初期思想史料研究

研究代表者 大桑 斉
(国史学)

近年新たに発見した二種の近世初期思想史料——『井上主計頭覚書』及『儒仏問答』について、これを翻刻し、注釈を加え、解説研究を付して、広く学界に紹介する目的の研究である。研究協力者として近世仏教思想史から平田厚志(竜谷大学助教授)・前田一郎(花園大学非常勤講師)・心山義文(竜谷大学非常勤講師)、近世儒学思想史から前田勉(愛知教育大学助教授)を委嘱した。また史料の翻刻・原稿化及び日常的な史料研究業務担当として福島栄寿(大学院博士課程)・武田朋宏(大学院聴講生)を研究補助員とした。

[1] 研究経過

研究活動は、次に記したように、ほぼ月一回の研究会を中心に行なわれた。当初予定では前半に『儒仏問答』を終了し、後半に『井上主計頭覚書』に入れると考えたが、予想以上に議論百出で急速な進展は望めず、『儒仏問答』を一応曲りなりにも終了して終った。研究会では、竜谷大学所蔵の『儒仏問答』板本(くずし字)コピーをテキストとし、担当者がこれを読み取り翻刻し、注釈を加え、さらに解説を付したコンピューター入力の下原稿が配布され、それについての報告を

受けて、参加者が討論する形式で行なった。研究会の開催は以下のものである。

平成6年

- 第1回 4月25日(月)午後5時～9時 第3研究室
分室1
『儒仏問答』問答第17件
報告者 武田朋宏補助員
- 第2回 6月1日(水)午後5時～9時 第3研究室
分室1
『儒仏問答』問答第18件
報告者 前田一郎囑託研究員
- 第3回 7月25日(月)午後5時～9時 第3研究室
分室1
『儒仏問答』問答第18件(その2)
報告者 前田一郎囑託研究員
- 第4回 8月18日(木)午後2時～7時 第3研究室
分室1
『儒仏問答』問答第18件(その3)
報告者 前田一郎囑託研究員
- 第5回 9月19日(月)午後5時～9時 第3研究室
分室1
『儒仏問答』儒仏違目事第1条～第5条
報告者 福島栄寿補助員
- 第6回 10月31日(月)午後5時～9時 第3研究室
分室1
『儒仏問答』儒仏違目事第1条～第5条
(その2) 報告者 福島栄寿補助員
- 第7回 12月12日(月)午後5時～9時 第3研究室
分室1
『儒仏問答』儒仏違目事第6条～第8条
報告者 平野寿則(特別参加、本学大学院
院博士課程)

平成7年

- 第8回 2月14日(火)午後5時～9時 第3研究室
分室1
『儒仏問答』儒仏違目事第6条～第8条
(その2) 報告者 平野寿則(特別参加、
本学大学院博士課程)
- 第9回 3月8日(水)午後5時～9時 第3研究室
分室1
『儒仏問答』問答第1件～第16件総括討
論

このような研究会の討論は、補助員によってコンビ

ューター入力され、原稿としての体裁がほぼ整った。しかしながら内容的にはまだまだ検討の余地がある。また上記で判明するように、『儒仏問答』の問答第1件から第16件に関しては、最終研究会で、この個人研究開始以前に作成されたアラ原稿を総括的に検討しただけであるので、いたって不十分で、研究としては未完に終わったといわざるをえない。

〔2〕研究内容

研究の対象とした『儒仏問答』は、林羅山の仏教批判に松永貞徳(頌遊)が答えた18か条に互る往復書簡に、貞徳の「仏儒違目事」を付して刊行された書である。刊行年次は寛文9年またはそれ以前であるが、実際に書簡が交わされたのは慶長末年で、近世の早い段階での儒仏論争の先駆と位置付けられるものである。

『儒仏問答』については小高敏郎が『近世文壇史の研究』(昭和28、至文堂)で始めて取り上げたが、その後問題とされることがなかった。近年にいたって島本昌一が『松永貞徳一俳諧師への道一』(1989、法政大学出版局)で論争の年次を考証し、また部分的ながら論争の内容を紹介した。しかしながら十分な研究には至っていない。

今回の研究にあたっては、底本として龍谷大学所蔵本及び内閣文庫所蔵本を用い、また林羅山の往簡は内閣文庫所蔵の『羅山先生外集』第十巻所収の「自駿府遣頌遊状」を対校本に用いた。この対校で、『儒仏問答』では18条の本文が「自駿府遣頌遊状」では19条であり、文章も若干の異同があることが判明した。また『儒仏問答』にあるルビは刊行にあたって付せられたものであり、ときには元の意味内容からはずれて、貞徳側に有利なように付せられたものもあることが判明した。これらは、底本が、貞徳の宗団によって後年刊行されたという島本説を補強するものである。

『儒仏問答』の主要な争点は、仏虚儒実、変化の理と因果、因果関係と三世因果、物部守屋と聖徳太子の崇仏排仏、生死の有常と無常、儒仏相似、異端と正統、仏語と儒教語、揚名と棄恩、三教一致、出家と人倫、などである。このうち特に変化の理と因果、聖徳太子の位置付けが大きく問題となっている。近世初頭に因果応報の矛盾が思想的問題化するという研究(大桑齊「近世民衆仏教の研究」、『日本の近世1』所収)からすれば、聖徳太子の問題も含めて、これらの問題を深める新しい史料として活用できるであろう。

またこれらの争点をめぐる羅山・貞徳それぞれの論

理構成や、諸文献の引用の仕方から判明してきた事柄も検討課題となった。第一に、羅山に顕著に見られるのは、元の文献の意味と異なった読替が頻繁になされていることである。これを貞徳が指摘することも少ない。ここから羅山の学のあり方、あるいは貞徳の儒学理解が窺われる。第二には貞徳は儒学を仏教の論理で包摂しようとしており、ここに貞徳の仏教思想の独自性が考えられる。第三に、論争としての対立点から、逆に両者の共通点も明らかになってくる。例えば羅山は変化の理を、貞徳は因果を主張するが、その根底となる転生を認めることで両者は共通の基盤に立っている。仏教としては当然のことであったにしても、これを認めることは、儒学としては大きな問題であるはずであり、ここから日本儒学の特性を考える糸口が見えてこよう。

羅山の排仏論は、日蓮宗との思想的緊張を契機としているという前田勉氏の指摘(『林羅山の挫折』東北大学付属図書館年報22、1989)がなされているが、『儒仏問答』はまさに法華信徒貞徳との論争であり、本書の研究から羅山排仏論への論議が深められることになろう。同様に貞徳研究においては、俳諧師貞徳という側面を越えて、彼の仏教信仰を明らかにすることになり、思想家貞徳に迫ることができそうである。さらに従来、ほとんど究明されていない京都町衆の法華信仰の内実にも光を当てることになろう。

本年度の研究はこれらの問題点を摘出するに終わり、本格的に深めるには至らなかったことを残念に思い、別途に研究の継続を考えている。

個人研究

『ユリシーズ』の研究

研究代表者 米本 義孝
(英文学)

(1) ジェイムズ・ジョイス(1882-1941)の『ユリシーズ』(1922)は、今世紀最大の文学作品であり、またこ

れは非常に難解な長編小説としても有名である。今から60年ほど前に岩波文庫が完訳しながら、以後絶版にしたのは読者が全然つかなかったためであろう。英米文学の研究者でも、ジョイスを専門に研究している人は別として、『ユリシーズ』の重要性を認めながらも読破した人が少ないのはその難解さゆえである。この作品が難解なのは、登場人物たちの意識の流れを主体にし、人間の内面をリアルにえぐりだしており、そのため、文学の範囲にとどまらず、宗教・哲学・心理学・美術・音楽といった人文科学の領域、政治・法律といった社会科学の領域、物理・数学・化学・医学といった自然科学の領域までわたっているからである。わたし自身、修士課程の学生のとき、『ユリシーズ』の講義があり、面白そうだと思って最初の講義にでたところ、担当の老先生が「私はずっと『ユリシーズ』を研究してきたが、難しすぎて未だにほとんど理解できていません」と言われ、そんな難しい作品を扱う講義はまっぴらというわけで、その講義を受講しなかったという経験がある。

それが今から5年ほど前、ジョイス研究の第一人者小田基氏から、日本人が『ユリシーズ』を読解できるようにするための詳しい注釈書を作るようわたしは依頼をうけた。2人の協議の結果、とりあえず原文の十分の一(ランダムハウス版で7、80頁)を選出し、2冊本にまとめることになった。

(2) そこでわたしは、ここ数年間『ユリシーズ』の読み方や意義を追求することに専念した。

まず、語学面では、非論理的で破格構文にみちた文体を解読することと、登場人物たちの「意識の流れ」に一貫性をもたせて筋をつなぐこととに重点をおいた。

つぎに、文学面では、内容を徹底的に把握することと、さらに、文学(ホーマ以来の西洋文学全般)、宗教(作品の全編でカトリック教の教義や儀式の意義が問われている)、哲学(トマス・アクィナスの宗教哲学など)、心理学(今世紀を代表する心理学者シー・ジー・ユングは『ユリシーズ』から多大の影響をうけた)、さらには自然科学など、作品中に縦横無尽に張りめぐらされた思想を原典にできるだけあたって解読することに重点をおいた。

大作品を研究する場合、見落としや誤解などがどうしても生じてくる。そこで、わたしの書き上げた原稿に対し、秋国忠教氏には文学と語学上の徹底的な検討と助言を頼んだ。秋国氏は多くの時間を割き、単に原

稿の検討だけでなく、文学と語学上でわたしの気づかなかったことを随分と補い、かつ辞書類からの引用の総点検までしてもらった。イギリス人デイビッド・パージェス氏には語学上のチェックだけでなく、宗教を含む風土習俗など西洋人でなければわからぬことなどを月2回定期的に教授してもらった。そして、最終的には小田基氏に総点検を頼んだ。

(3) 真宗総合研究所から受けた「一般研究」の研究期間である平成6年度のうち、前半は、その直前までにほぼ書き上げてあった『ユリシーズ』の注釈本の1冊目用の原稿（400字詰め原稿用紙約550枚）の見直しについやした。その際、約600冊あるジョイスに関する研究書のなかから、研究に必要で日本では入手不可能な文献などを出来るだけ入手して、見直しに全力をあげた。

ジョイス作品の特色は、すべてアイルランドの首都ダブリンが舞台であり、20世紀初頭のダブリンをリアルに描いたことである。わたしは、ジョイス研究としては彼の初期の作品の『ダブリンの人びと』（1914）から入ったが、その短編集も表題から判明するように、すべての短編はダブリンが舞台になっている。今回の『ユリシーズ』もそうであり、しかも長編小説でありながら、1904年6月16日という1日だけのダブリンに舞台の日時が設定してある。わたしは、ジョイスの描く作品から、ダブリンという都市を頭のなかで10数年来作り上げていた。それを今回いただいた研究費を使って、夏休みを利用してダブリンを訪れ（わたしとしては初めての訪問）、自分の頭で作り上げたダブリンと実際のそれとの相違を確かめた。これはわたしにはたいへん意義があった。また、ダブリンとロンドンで、わたしの知らなかったジョイス研究の本を見つけたことも収穫があった。

平成6年の夏までの、『ユリシーズ』の注釈本の1冊目の原稿が完了し、これは平成8年1月に研究社出版から上梓の予定である。そして、平成6年度の後半は注釈本の2冊目用の注釈作りに励み、今日に至っている。この2冊目の注釈を完成するのは平成8年の年末頃と予想しており、まだまだこの研究を続けるつもりである。

「第8回ヨーロッパ真宗会議」に参加して

国際仏教研究・研究員 樋口章信

はじめに

(a)国際仏教文化協会(IABC)について

Jodo Shinshu: The Way of Hearing(浄土真宗:「聞」の道)のテーマの下、1994年8月8日から10日までの3日間、オーストリア・ウィーン仏教センターにおいて「第8回ヨーロッパ真宗会議(European Shin Conference)」が開催された。それに先立つ同月5、6日の2日間ウィーン大学において「国際真宗学会(IASBS)ヨーロッパ部会」が開かれたが、スケジュール上の都合で私は参加できなかった。この度のヨーロッパにおける真宗会議について簡単に報告をさせていただく。IASBSについては1993年8月初旬に大谷大学において第6回大会が開催されている。多くの方々懐かしき思い出されることであろう。参考のためIABCの沿革を簡略に記す。

この組織は本願寺派に属する組織で、1980年に京都において設立された。当初からその活動は主としてヨーロッパを中心とするものであった。会長は大谷光照前門主がつとめられ、初代理事長は佐藤哲英師であった。その後、山崎昭見師を経て、現在千葉乗隆師が就任されている。IABC英文機関誌、*Shin Buddhist*が1993年度から新たに発行されているが、それによれば設立の主旨は次のごとくである。

The International Association of Buddhist Culture, abbreviated to IABC, was founded in Kyoto in 1980 to promote Buddhism throughout the World, especially the Other-Power teaching of Shinran Shonin (1173-1262), popularly known as Shin Buddhism. We sponsor conferences, lecture-meetings, seminars, etc., and offer subsidies to Buddhist groups and scholarships to well-motivated students of Buddhist philosophy and culture.

上記から、「真宗として知られる親鸞聖人の他力の教学を世界に広める」ことが主目的であることが理解さ

れよう。真宗協会というかたちをとってイギリス、ベルギー、西ドイツ、オーストリア、スイスにおいて伝道活動がなされてきた。最近では下記(8)の発表にもあるように、東欧への窓口として光明寺という新開教基点が、チェコ、ならびにハンガリーの国境に隣接するWeingartenという町に設立される予定である。

IABCは「国際真宗学会」(IASBS)の母胎となった。現在IASBSは世界の真宗学者間における研鑽・交流の場を担っているといえる。IABCによってジャーナル*The Pure Land*が年2回発行され、ヨーロッパ語圏における真宗に関する学問と開教の両側面を担った。発表論文も当初はドイツ語、フランス語、英語が使用された。*The Pure Land*誌は現在IASBSの学会機関誌になっているが、紙面を主に英語で統一している。昨年発行されているIABCの機関誌*Shin Buddhist*も主として英語に統一しているようである。

「第8回ヨーロッパ真宗会議」の概要を知っていたために、発表内容を大会プログラムによって記す。

8月8日

(1)「聞」とは何か(What is Hearing)

徳永 道雄(京都女子大学)

(2)ここで聞くということ

(Hearing with the Heart)

ルース・タブラ

(BSC仏教研究センター、ホノルル・ハワイ)

グループディスカッション(「聞」の道)

司会進行 グスタフ・ピント

(ブラジル・サンパウロ市)

8月9日

(3)浄土曼陀羅について

(Pure Land Buddhist Mandalas)

稲垣 久雄(龍谷大学)

(4)信心と念仏(Shinjin und Nembutsu)

ハロルド・ドール

(ウィーン・オーストリア真宗協会書記長)

(5)声明—仏を観ずる様々な形式

(Shomyo — Verschiedene Formen, den Buddha zu vergegenwärtigen)

ウエルナー・コーディテーク

(6)他力(Tariki)

アンドレ・シュヴリエ

(イヴェルドン・スイス)

(7)真宗を聞くということ(Hearing Shinshu)

ジェローム・デュコー

(ローザンヌ大学・スイス)

(8)光明寺プロジェクトについて

フォルカー・ツォッツ (ウィーン大学)

(9)「聞」ということ(The Hearing)

向坊 弘道 (北九州市)

(10)本願と五逆罪

(Primal Vow and Five Grave Offenses)

妙宗ジェドルゼジュースカ (光輪寺)

8月10日

(11)妙好人—われらが時代の理想か?

(Myokonin — ein Ideal für unsere Zeit?)

フリードリッヒ・フェンツル

(ザルツブルグ・オーストリア真宗協会名誉会長)

(12)蓮如上人の晩年

(The Last Age of Rennyo Shonin)

都路 照信 (岡崎市・本宗寺)

(13)聞法をとおして我々の生活は変わるのか?

(Will our way of life change, if we hear the Dharma today?)

都路 初子 (同上)

(14)仏教的な意味においてジョン・レノンを聞く

(Hearing John Lennon in a Buddhist Way)

石田 法雄 (滋賀大学)

(15)アフリカにおける念仏(Nembutsu in Africa)

モラア・オサカ (ケニア)

(16)聞くということの性質、あるいは性質を聞き開くということ

—真宗への人格的アプローチ

(On the Nature of Hearing — or Hearing the Nature. A Personal Approach to Shin Buddhism.)

アーヒム・ヴィルファールト (フランクフルト)

(* 邦題は試訳したものである。プログラムそのものには番号が付されていないが、スケジュール変更があったので、上記の番号によってそれを示す。キャンセルされた発表は(6)と(16)である。また(16)の発表と(8)

が差し替えになった。スイスからのマリアナ&ガストン・ブザンソン夫妻の仏像彫刻実演や、アーヒム・ヴィルファールト&ウエルナー・コーディテーク氏によるヨーロッパ雅楽コンサート「音楽による仏言への讃仰」ならびに帰敬式がおこなわれたが、それらはここには掲載していない。また(3)の発表は、ツォッツ氏によって原稿が代読された。)

大会参加の印象

(a)開会式に臨んで

IABCは実践面を重視している。ヨーロッパ開教・伝道という具体的な仕事がこの十数年間「協会」を通じてなされ、翻訳活動等において成果が上げられてきている。欧州各地から会議への参加者を見るようになり、それはポーランドなどの東欧圏から、遠くアフリカに及ぶほどである。浄土真宗への関心が広まるにつれ、地域の教会のリーダーが生まれ、「協会」というかたちで各地に支部が置かれるようになっていく。組織的統一・統合への蹉跌も一部あるように見受けられるが、それはむしろ根の張ったヨーロッパ教会創出への兆候であり、このような過程を経て平等な念仏者の共同体が実現されてゆくのであろうと思われる。

「ヨーロッパ真宗会議」はオーストリアにおいて、第2回(1982年)、第6回(1990年)そして今回の第8回大会と、都合3回開かれている。今回は約60名の参加者であった。開会式において、前門主ご夫妻、千葉乗隆博士、ならびに本願寺国際センター所長永谷隆明師による歓迎メッセージが述べられた。

国際仏教文化協会総裁として前門主大谷光照師は、現在ヨーロッパがかつてない変動のただなかであり、諸民族間の闘争等により、一部の地域で平和と静寂が失われつつあることに言及された。またさらに人類の未来がかならずしも明るいとは言えないこの時代においてこそ、われら真宗徒は、ただちに生命本来の尊厳性に目覚め、責任をまっとうしながら本願内存在としての自覚をともに深めてゆくべきことを指摘された。

協会理事長の千葉博士は、蓮如上人500回忌記念法要が間近であることに触れられ、『御一代記聞書』のなかの次の言葉を引用された。すなわち、「とほきはちかき道理、ちかきは遠き道理なり。“燈台本くらし”とて、仏法を、不断、聴聞申す身は、御用をあいみて、いつものことと思ひ、法儀におろそかなり。遠く候う人は、仏法をききたく、大切にもとむる心あるなり。仏法は大切にもとむるより、きく者なり。」という一節である。

はるか日本から遠いウィーンに来て、身をもって考えさせられたことである。

永谷師はかつての真宗共同体である「講」を参考にされながら、今後のヨーロッパ教団の展開を暗示された。そのなかで日本近世真宗史における地域伝道組織を構成した「講」をStudy Groupと理解されたことは印象深い。

(b)各発表を聞いて

発表セッションについていくつか簡単に報告したい。司会進行はウィーン大学のフォルカー・ツォッツ氏が担当された。発表のなかで、8月9日の(5)(8)(9)、8月10日の(11)から(15)までは宗教的実践をふまえた発表であった。このたびの「聴聞」というテーマそれ自体が実践的性格を帯びているといえよう。名号の謂われを聴聞することは身をもってなされなければならないことである。

(1)は徳永道雄教授の発表である。「聞」ということが我々における宗教体験の「極み(summit)」であり、単なる感覚的行為ではないこと、またその主体は西洋的な主体とは異なったものであることを、いくつかの喩えによって説明された。日本語で「むこうに鳥の声が聞こえる。」あるいはまた「むこうに山が見える。」などという場合、そこに「私が、私は」は必要とならない。これは「私」が省略されているということではなく、「私」を主張する必要がないということの意味している。むしろ「鳥」や「山」が我々の「聞」や「見」を可能にしている。それらの対象を我々が認識する以前にそれらの存在があり、動かしがたいその存在の力によって我々に現前し、それらの存在を自覚させるのである。真理把握の東洋的・仏教的方法は、pratiyasamutpāda(縁起性=related coorigination)の認識においてである。すべてが相関しており、環境や状況から独立して存在するものはない、ということの確認が前提であり、「一と多」、「自と他」もそのような相関関係において認識される。

この他に徳永教授は「聴聞」の「聴」と「聞」の両側面にもスポットをあてられ、「ユルサレテキク、シンジテキク」という、『教行信証』「行巻」の『無量清浄平等覚経』の言説にたいする親鸞聖人の左訓に触れながら論を進められた。「聴」を“to be given a chance to listen to the Dharma”というように訳されていたが、実に興味ある解釈である。

(2)はルース・タブラ女史による発表である。タブラ女史は多民族文化圏ハワイにおける念仏との出会いを体験的に語られた。また浄土真宗と日々の生活との不

離一体性を強調された。

(4)はオーストリア真宗協会のハロルド・ドール氏の発表(ドイツ語)であった。

(7)はジェローム・デュコー氏の発表である。氏は1983年に『歎異抄』のフランス語訳を出された。Hearing Shinshuすなわち「真宗を聞くということ」についてであったが、「聞く」ということがそのまま浄土真宗である、という問題設定にもとづいて考察された。そもそも仏教経典は「如是我聞(我聞きたまえき、是の如し)」ということから始まる。いわゆる六事成就の最初の「聞成就」である。仏の名号を聞いたということは仏の教えを聞いたということになる。如是というのは「信成就」であり、聞と一体の世界である。他に「時成就」・「主成就」・「処成就」・「衆成就」ということが出てくるが、氏は特に聞の成就に焦点をあてられた。また『歎異抄』第2章を根拠にされて、いかに真実信心の伝承(transmission)ということが大切であるかということについて力説された。「信不具足」・「聞不具足」、親鸞の善信という名乗りの意味にも言及されながら、疑心なく本願の教えに聞くことが真宗の肝要であることを説かれた。

(9)は信仰体験にもとづく感動的な発表であった。向坊氏は、浄土真宗と出遇われた体験とその後の歩みのなかで、すでに数冊の著作を出版されている。宗教者としてだけでなく、社会福祉活動家としてもよく知られている方である。不慮の交通事故によって車椅子の生活を余儀なくされた氏が、いかに「聞」の世界を獲得していかれたか、氏の不屈の歩みとその背後で動く本願の世界の不思議さを述べられた。謝念に満ちたその発表は人々の心に深くしみわたった。「聞いていくこと」は「力」であるという言明は聴衆に感動を与えた。

(11)はF.フェンツル氏の発表である。妙好人こそが日本を代する信仰者であると語られ、その例として因幡の源座を挙げられた。また氏はヨーロッパにおいて妙好人に比せられるべき人物としてハリー・ピーパー氏を紹介された。フェンツル氏は、パフォーマンス志向の現代社会においていかに妙好人的存在が稀少であるかを力説された。それは名利、学問、権威、権力などの自力的世界から離れて生きることの困難さによるとされる。ヨーロッパでは特に病む者、死に至ろうとしている者、人権や尊厳を剝奪されている者達とともに歩もうとする人こそが求められており、そのような人々は学術の世界からは出現しない。阿弥陀の呼び声に耳を傾ける人であるかどうか、妙好人たるべき要件である。ほぼこのような内容であった。

さいごに

カルマ・カギェウ派がドイツ、スイス、オーストリアにそれぞれ支部を設立している。アメリカと同様、ヨーロッパにおいてもチベット仏教にきわめて高い関心もたれているが、その一方で親鸞の思想・信仰も少しずつではあるが着実に活動基盤を固めていると思われる。オーストリア東部に建設・設立予定の光明寺プロジェクトも、ハンガリーとスロバキア国境に半マイルのところであり、東ヨーロッパに開教の視座が定められつつあるようだ。ハンガリー語をはじめとする東欧の言語に真宗典籍を翻訳しようとする計画があると聞く。その中心となって運動をされているツォッツ氏の話を伺う機会があった。規模の大小は問わず、着実に研修・研究をおこなうことができる施設をまず建てたいとツォッツ氏は述べられていた。

学問的研究対象としての仏教もさることながら、欧米では、現実社会においてその宗教者の生きざまに触れることのできる仏教が求められている。それは一世代前からの禅仏教隆盛の動因であったと思われるが、チベット仏教への関心にもそのことは言及可能である。

(*オーストリア仏教センターはオクトパス出版という書店をもっており、1976年以来年4回「菩提樹(Bodhi Baum)」という機関誌を出している。その内容を一瞥すればオーストリアにおける仏教への関心の実際が理解できる。)諸価値を内包する多宗教が存在するなかで、宗教的リーダーとは何かについての厳密な考察がなされなければならない。信念・信仰の世界が伝達されるのはまさに「人間」とおして以外にありえない。その伝達のされかたが研究対象となりうるのであり、「聞」という今回の大会のテーマはそこに導かれよう。だれが、どこで、どのように、なにを、なんのために、だれから「聞」き、だれが、どこで、どのように、なにを、なんのために、だれにたいして「語」るのかということが、それぞれの関連する内容のもとで解明されなければならない。その中心となるのは「だれが、だれにたいして」という主体における存在様式の問題なのである。またひとつ重要なのは、各信仰者のところを把握した指導者によって再度伝達された内容が社会に与えるインパクトである。その信仰には、異なった諸価値を有する社会とどのように共同していくべきかという、社会内で共存していくための原理が自己批判的に媒介されていなければならない。

海外での浄土真宗に関する会議は、あらためて自己の内容とそれによって立つ場所について再考する機会を与

えてくれる。相互文化圏における価値観の違いは事実として“しんどい”。しかし、異なりは方法あるいは方便として「他」より施与されているという観点もあるのではないだろうか。当然その差異の背景には「共存にむかう愛」の存在が前提となろう。

最後になりましたが、真宗総合研究所・国際研究班チーフ多田稔先生ならびにスタッフの方々、また現地でいろいろとお世話くださったフォルカー・ツォッツウィーン大学講師夫妻をはじめとするウィーン真宗協会の方々、そしていろいろアドバイスをあたえてくださった稲垣久雄博士に感謝いたします。

アメリカ宗教学会1994年度年次大会参加報告

国際仏教研究・研究員 渡辺 啓真

1994年度アメリカ宗教学会年次大会は、11月19日から22日にかけてシカゴにおいて聖書学会と共催の形で開催された。ミシガン湖を見下ろすヒルトン・アンド・タワーズ・ホテルとラマダ・コンGRESS・ホテルを主会場に、米国、カナダを中心として世界各国から、若手研究者を含む多数の参加者により、講演、セミナー、ワークショップ、ミーティングをはじめ、各種のイベントが多数開催された。初冬を思わせる寒風が吹きつけるなか、会場では、熱気にあふれる討論が繰り広げられた。筆者は、国際仏教研究班の一員として、海外の研究動向の見聞と資料収集を目的に参加させていただいた。以下では、その簡単な報告を行う。

期間中、アメリカ宗教学会だけで、227のセミナー、ワークショップ等の研究発表が行われたが、国際仏教研究に関わりの深いと思われるものの主なプログラムは、次のようなものであった。仏教研究のパネルは、単独のものが四つ、北米宗教研究と共催のもの、日本宗教研究と共催のものそれぞれ一つと、例年通り活発な活動がなされている。またそのほかにも、日本宗教研究の分野では、神道と日本の民俗宗教をテーマとしたパネルが開かれ、本年新たに、タントラ研究のパネルが開かれていた。以下、テーマ、チェアパーソン、発表者、発表題目を挙げておく。

[Buddhism Section and North American Religions Section]

Theme: *Issues in North American Buddhism*

Chairperson: Charles S. Prebish, Pennsylvania State University

Anne C. Klein, Rice University

Buddhists, Feminists, and the Great Bliss Queen

Paul David Numrich, College of DuPage

The Prospect of the Sangha in American Theravada Buddhism

A. W. Barber, University of Calgary

The Prajna Temple: Changes in the Southern Alberta Buddhist Community

Kenneth K. Tanaka, Graduate Theological Union

Buddhist Churches of America: Prospects of the Second Century in North America

Rita M. Gross, University of Wisconsin

Feminist Issues in American Buddhism

[Buddhism Section and Japanese Religions Group]

Theme: *Rethinking Kamakura Buddhism: The Case of Myōe Kōben*

Chairperson: Martin Collcutt, Princeton University
George J. Tanabe, Jr., University of Hawaii, Manoa

Myōe and the Benefits of Buddhism

Mark T. Unno, Brown University

The Ritual of Sand and the Mantra of Light

Ryūichi Abe, Columbia University

Of Myōe, Poetry and Mantra

Soho Machida, Princeton University

Behind Myōe's Criticism of Hōnen

[Buddhism Section]

Theme: *New Voices in Buddhist Studies*

Chairperson: Mathieu Boisvert, Université du Québec à Montréal

Jonathan A. Silk, University of Michigan

Oedipal Calumny and Schismatic Rhetoric in Indian Buddhism

Mahinda Deegalle, University of Chicago

The Art of Buddhist Preaching (Bana) in Sri Lanka: Sinhala Religious Rhetoric in the Popularization of Theravāda

Kyoko Tokuno, University of Oregon

Morality and Salvation: The Book of Trapusa and Lay Buddhism in Early Medieval China

Theme: *Idea and System in Buddhist Philosophy*

Chairperson: John Makransky, Boston College

John Y. Cha, Northwestern University

Mārga-Theory and the Subversion of Principle

Cyrus Stearns, University of Washington

Emptiness of Self-Nature and Emptiness of Other: The Theories of the Tibetan Buddhist Master Dolpopa

Joe Wilson, University of North Carolina
Will the Real Asanga Please Stand Up?: On the Very Nature of a Doctrinal System

William S. Waldron, Madison, Wisconsin
Yogacara and Modern Depth Psychology: What is a 'Buddhist' Unconscious

Georges B.J. Dreyfus, Williams College
Meditation as an Ethical Activity

Theme: *Religious Meanings of Emptiness: A Tribute to F.J. Streng*

Chairperson: Ruben L.F. Habito, Southern Methodist University

John P. Keenan, Middlebury College
Emptiness as a Paradigm for Understanding World Religions

P. Jeffrey Hopkins, University of Virginia
The Religious Significance of Emptiness in Yogacara Buddhism: A Tibetan Perspective

John C. Maraldo, University of North Florida
Nishitani Keiji on Religion and Emptiness

Randall Nadeau, Trinity University
On the Universalizability of Religious Categories: Frederick J. Streng and the Concept of Emptiness

Theme: *Gender and Community in South and East Asian Buddhism*

Chairperson: Robert Buswell, University of California, Los Angeles

Richard S. Cohen, University of Michigan
Ajanta's Community: Kinsmen of the Son

Alan Cole, University of Illinois, Urbana
Buddhist Filial Piety in the Tang: The Mother and Son Romance

Jong-Myung Kim, University of California, Los Angeles

The Assembly of Eight Prohibitions (P'algwanhoe) in Medieval Korea: Its Meaning in History

Paula K. R. Arai, Vanderbilt University

A Case of Ritual Zen: In Gratitude to Ananda

Galen Amstutz, Florida State University
Sekiyama Kazuo on Japanese Buddhist Preach-

ing

[Japanese Religions Group]

Theme: *Exploring Shinto and Japanese Folk Religion*

Chairperson: John T. Brinkman, Saint John's University

John K. Nelson, University of Puget Sound
Flowers or Phalli?: A Contested Iconography of Sexual Symbolism at a Shinto Shrine

David L. Barnhill, Guilford College
The Hijiri Poet: Basho, Folk Religion, and Shinto

H. Byron Earhart, Western Michigan University
The Making of a Documentary: Fuji: Sacred Mountain of Japan

[Tantric Studies Consultation]

Theme: *Toward a Future Tantric Studies*

Chairperson: Charles D. Orzech, University of North Carolina

Dennis Hudson, Smith College
Krishna's Mandala

Donald S. Lopez, Jr., University of Michigan
Coming to Terms with Tantra

Matthew Kapstein, Columbia University
Tantric Religion and the Question of Comparison

[Asian American Religions, Culture and Society Consultation]

Theme: *Asian American Potpourri of Survival*

Chairperson: Jung Ha Kim, Georgia University, and Timothy Tseng, Denver Seminary

Tara K. Ogden, University of California
Behind Barbed Wire: Religion in the Japanese Internment Camps

Mark S. Mullinax, Iona College
Does Confucius Yet Live?: Answers from Korean American Churches

Charles S. Prebish, Pennsylvania State University
Asian American and Euroamerican Buddhism: An increasingly Unfriendly Partnership

Michele Saracino, Yale University
Daughters Loving Their Mothers: In the Midst of Colonialism and Orientalism

筆者が出席したパネルの一つである、仏教研究と北米宗教研究共催のパネルでは、2世紀目を迎える北米の仏教の現状と、その課題について、様々な角度から報告がなされた。従来は浄土教系の影響が強かったカナダのアルバータ地域においてベトナム系の仏教寺院が開かれ、生じている変化についての報告、フェミニスト的視点から見たアメリカ仏教の変容について、将来の仏教の発展にとって西洋のフェミニズムが与えるであろうプラスの影響を論じた報告、アメリカ仏教会が抱えている、僧侶の不足、信徒数の減少、地方の寺院の閉鎖、といった問題の指摘と、最近の仏教研究センターの設立などを新たな組織化へと繋げていく必要性についての報告などがなされた。移民を中心として移入された仏教から、アメリカに根差した仏教へと脱皮していくにあたっての様々な課題と、新たな展開の可能性が示唆されていた。

また、筆者の研究領域(倫理学)に関連するセッションも、「動物と神学」「倫理学における女性」「コモン・グッドの倫理学」「エコロジカルな神学の倫理的パースペクティブ」など多数開催されており、この機会にいくつかに参加させていただくことができた。エコロジーやフェミニズム、人種問題はもとより、動物の権利運動や同性愛をめぐる問題など、アメリカでは宗教と人々の道徳上の規範意識とが密接に結びついていることをあらためて感じさせられた(会場の受け付けには、大会中のセクシャル・ハラスメントに関するアンケート用紙と箱が設置されていた)。また、諸文化の衝突、価値観の相克に発する諸問題に対して、「多文化共存主義(multiculturalism)」「コモン・グッド」といった理念をテーマにした発表が多かったことも、米国の現状がかかえる問題の所在を示すものとして興味深かった。

期間中、例年通り、100社以上の出版社による見本市が開かれており、資料の収集を行うことができた。特に目をひいたのは、聖書研究の分野で、マッキントッシュやウィンドウズ用のCD-ROMを使ったデモが、あちらこちらで行われていたことだった。ヘブライ語、ギリシア語、ラテン語、各国語訳の聖書などが辞書や索引とともに相互に参照できるようになっているなど、各社がその機能を競っていた。仏教研究においても、今後こうした傾向がますます強まるであろうことを予感させられた。

講演の中では、21日の夜に開かれたユルゲン・モルトマン(Jürgen Moltmann)教授による記念講演に出席することができた。現代ドイツを代表する神学者であるモルトマン教授の講演とあって、会場となった

ホールは聴講者で埋められた。“Theology and the Future of Modern World”と題されたその講演では、まず、メシアニックな視点から近代世界の意味を捉えたうえで、欧米を中心に展開してきた近代が、サブ・モダン(submodernity)によって支えられたものであること、すなわち、第三世界、自然、さらには将来世代の搾取、犠牲の上に成り立っていることを指摘し、そこから生じている現代の危機を克服するために、近代の未完のプロジェクトである、人類の平等とそれにもとづく自由を実現することこそが、たんなる理想主義ではなく、人類の生存のためのリアリズムであり、自然の支配と自然からの疎外とを克服するエコロジカルな社会の実現をも含めて、近代を再創出(reinvent)するという課題の重要性が説かれた。そして、そうした希望を表現していくことを「神の王国の神学(theology of God's kingdom)」としての神学の課題として強調された。「希望の神学」で知られる教授の、現代への批判的視点と未来への希望の可能性への眼差しのいずれをも手放さない確固とした姿勢がよく示されていたように思う。

最後になりましたが、貴重な機会を与えていただいた真宗総合研究所をはじめ関係者の方々に感謝して、この報告を閉じます。

真宗総合研究所彙報 1995. 4 - 1995. 9

■研究所委員会

5月26日(金) 16時10分 博綜館第3会議室
議題 1995年度指定研究について

■「指定研究」チーフ連絡会

4月24日(月) 18時 博綜館第3会議室
議題 昨年度の経過報告、新年度の研究計画について

■「指定研究」会議/研究会

大学史編纂研究

5月10日(木) 12時50分 博綜館小会議室1
議題 大谷大学100年概略史編纂準備

国際仏教研究

5月18日(木) 4時10分 博綜館小会議室1
テーマ パネル1のまとめ
講師 宮下 晴輝 助教授

6月14日(水) 12時10分 博綜館小会議室1
テーマ 国際真宗学会第6回大会の報告について

■「一般研究」会議/研究会

日本思想の歴史的総合的研究

5月18日(木) 18時 第2研究室分室1
テーマ 古代ギリシアにおける『哲学』という名前と概念
講師 箕浦 恵了 教授

6月2日(金) 16時10分 第2研究室分室1
テーマ 現代における哲学の脱構築—フランスを中心として—
講師 水野 和久 元神戸大学教授

6月13日(火) 16時10分 第2研究室分室2
テーマ 現代における哲学の脱構築—アメリカを中心として—
講師 富田 恭彦 京都大学助教授

7月20日(木) 18時 第2研究室分室1
テーマ 近世における〈哲学〉という名前と概念—デカルトからヘーゲルまで—
講師 須藤 訓任 助教授

■学会参加/調査派遣

第7回国際チベット学会

1995年6月18日~24日までオーストリアのライプニッツで第7回国際チベット学会が開催され、西

蔵文献研究班白館戒雲研究員、兵藤一夫研究員、今枝由郎囑託研究員、修士2回生三宅伸一郎が参加した。

ヨーロッパ各大学の資料調査

「日本思想の歴史的総合的研究」

7月23日~9月15日まで大河内了義研究員がゲッティンゲン大学、ハイデルベルク大学などの共同研究者との討議、シンポジウム、又、バーゼルの出版社Schwabeと研究成果のドイツ語出版に関する打ち合せを行ない資料収集を行った。

国際真宗学会第7回大会

8月21日~23日までハワイのホノルルで国際真宗学会第7回大会が開催され、国際仏教研究班の宮下晴輝研究員、加来雄之研究員、樋口章信研究員、渡辺啓真研究員が参加した。

■人事

1995年4月1日付を以て、企画広報課より中村雅亮が異動、又囑託事務員として岩井麻理子が採用された。

研究所報 第33号

1995年11月30日 発行

編集発行 大谷大学真宗総合研究所

〒602 京都市上京区寺町通今出川上ル二丁目

Tel.075-212-5500 Fax.075-212-5501